心奥探訪

～寂しさを抱えた少女が選んだ 大切にした「想い」～

穏やかな秋の午後、その人はカフェの窓際に座っていた。
こちらを見つけると大きく手を振って自分の存在を示そうとしている。
いや、示すまでもなく彼女が纏う雰囲気は優しく力強い。

しかし彼女がずっと思い悩んでいたことがある。
「自分の想いとか芯とかそういうのがわからないんですよ」

不思議な話だ。
こちらからすれば彼女の言動から伝わってくるものが数多くある。
いつも楽しくいるその姿から、その言葉から、何かを受け取る人も多いはずだ。

彼女の笑顔の奥にある想いはどんな形をしているのか？
彼女が抱く芯は何を伝えたがっているのか？

そこには子供の頃から変わらない、麻のような涼やかさと優しい強さが大きく手を振っていた。

双子の姉として生まれた彼女。
厳しい父の愛は幼い彼女にとって理不尽にしか受け取ることができなかった。
母も自分を助けてくれる存在ではなく、仕事の忙しさも重なり
自分には興味がないんだと感じていたという。

そんな彼女の一番の理解者が双子の妹。
それは当時から今日（こんにち）に至るまで変わらないと語る。

「親からは構ってもらえなかったけど、妹がおったから楽しかったんです。」

寂しさの反動からか家ではいい子、外ではやんちゃの繰り返し。
時にやんちゃがヒートアップし、姉妹共々こっぴどく叱られたこともあったという。

そんな小学生の大半通っていたのが今でいう学童。
大人をからかいながら年齢関係なくみんなで楽しく遊んでいた。

中学では友人とのジャンケンに負け、卓球部に入部。
3年間通ってはいたが、ずっと遊んでいたという。
時に歌いながら、時にしりとりをしながら練習に取り組む。
上を目指すよりも“楽しくやりたい”が強く、試合の勝敗にも興味はなかった。

元々双子ということで比べられることもあった彼女。
勉強もスポーツも容姿でさえも妹の方が優れていると語る。
そんな妹が誇らしくさえあったという。
そう語る彼女から劣等感を感じないのは、優劣に良いも悪いもなく
ただそのまま受け止めているからだろう。
でなければこんな自然には笑えない。

高校に入り彼女の日々に大きな変化が訪れた。

「あったかい大人になりたくて」

自分自身が感じた寂しさ。
それを感じている子供たちのために何かやれることはないのか？
考えるよりも先に福祉センターに電話をかけ、ボランティア団体に登録。
ボランティア活動が始まった。
当時は家に帰ることも少なくなり、友達、バイト、ボランティアの日々だったという。

バイトやボランティアで知り合った友人たちともすぐに打ち解けたのは、
もう一つ、彼女自身の大きな変化があった。

一見すると奔放に生きてきているようだが、
中学までは女の子らしくしないといけないという思いがあり無理をしていたという。

「何も出来ない自分でもいいんやって。」

色んなしがらみから逃れるように彼女は彼女が思う女らしいをやめた。
それはある意味、本当の自分、素の自分と言えるのかもしれない。
飾ることをやめ自然体の自分を見せたことで友達は爆発的に増えたという。
同時にそれは、彼女にとって”出来ない”自分を受け入れてくれた証明でもあった。

彼女の中で「友達」という言葉の重みは一際大きい。
絶対的な味方。
もちろん誰彼というわけではない、ただそこに確かな信頼を寄せる相手を
彼女は「友達」と呼んでいる。
それは当時の彼女にとって親に代わる存在だったのかもしれない。

介護の専門学校時代、留年の危機や赤点のピンチを救ってくれたのは
いつだって友達であり、卒業できたのは友達のおかげだという。

子供の頃から年齢関係なく、フラットに人と接してきたスタンスは
仕事についてからも変わらなかった。

チームとして動く。
仕事も毎日が楽しくて仕方なかった。

この頃には父親との関係性にも変化があり、
両親の愛情にも気づくことができたという。

そして迎える出産。
子育ても楽しく、一緒に楽しみたいという理由で
同じ歳の子供を持つ同じ歳のママを募ってコミュニティを作ったり、
毎月イベントをしたりと子どもとの時間を誰よりも楽しく過ごした。
それは何より自分がして欲しかったことをしてあげていたのかもしれない。

そんな一方で夫からはモラハラを受けていた。
それでも子供がいたから保てていたという。

当時を振り返り、自分を押し殺し自己肯定感が毎日削られていたと語りながらも、
『子育ての時期をトータルで見ると楽しかったと言えます』と語る。

彼女の強さの根源。
「楽しい」ことが何よりも好き。
「楽しむ」という強い想い。
それはもしかすると同じ分だけの「寂しさ」を抱えていたからとも言える。
けれど、だからこそ強い絆を紡いでいくことができた。
深い愛情で向き合うことができた。

彼女が子供の頃に感じた寂しさ。
そんな経験が今、彼女の強さとなっている。

「自分を犠牲にして頑張ってる人が多いなって。」

しんどい時、自分のことを嫌っている時、自分を責めている時、
人は心から楽しさを感じることができない。
周りのために頑張りすぎている人。
しんどいことのために頑張りすぎている人。

そんな人たちに"楽しい"を届けたい。
楽しいを通じて自分を大切にしてほしい。
今彼女が伝えたい想い。

だから彼女は楽しいことを選ぶ。
たとえ誰かに軽く見られようとも。
”楽しい”の大切さを知っているから。
”寂しい”の大切さを知っているから。

彼女の想い、それはまるで大きく大きく広げた衣のように、
寂しさで震える子供たちを
自分を犠牲に頑張りすぎている人たちを
今日もどこかで優しく包み込んでいる。